

わたしの視点

from JICA Leaders



photos by Tanimoto Mika

技術協力の真価を インドに問う

経済成長の一方で、中間所得層と貧困層の格差が拡大し続けるインド。自立心が高く、多様性に富んだ同国の開発課題に、日本としてどう取り組むのか。求められる協力の形を、藤井知之・JICAインド事務所長が語る。

JICAインド事務所長

藤井知之

による開発とのバランスを考慮して慎重に案件選定を行っています。

また、インドは約40年前から近隣国などへ経済・技術協力をを行う援助供与国でもあります。しかし、それらを裏返せば、インドは強い自立心とオーナーシップを兼ね備えており、かえって技術協力がやりやすく、協力の成果が発現しやすい国であるとも言えるのです。

技術協力は必要ないのか

インドは本当に技術協力を必要としないのか。資金さえあれば近い将来は経済成長の力で貧困層の暮らしが豊かになるのか。実際は、ここ数年で人口の約30%を占める中間所得層以上の人々と貧困層との格差

は縮まるどころか拡大しているのです。この現状を受け、インド政府は貧困対策を重点課題とし、農村インフラ整備や、保健、福祉、農業普及などの行政サービスに力を入れています。

しかし、残念ながらこれらの施設や制度は末端で機能不全を起し、貧困層の人々がこうしたサービスを十分に享受することができていません。それ故、現場に足を運んだことのない官僚は、新たな制度を作った現状を打開しようと知恵を絞りますが、ここに貧困問題の原因の一つがあるのです。立派な制度ができて現場でそれを動かす人材が育っていなければ何の役にも立たないし、現状に合った制度でなければ維持することはできないからです。

現在JICAが実施している「養蚕普及強化計画」プロジェクトでは、JICA専門家がインド人技術者と共同で技術開発し、農家を巡回指導した結果、日本の養蚕技術が普及し農家収入が増加しました。「リプロダクティブヘルスの向上および女性のエンパワメント」プロジェクトでは、JICA専門家が地域医療センターとともに助産師研修を実施し、農村でも質の高いサービスが受けられるようになりました。視点をあえて、現場から上流を見上げるとインドにおける技術協力のニーズは未曾有であることが実感できるのです。

国土が広く人口の多いインドでは、地域ごとに風土、人種、言語、宗教などが異なり、課題も多岐にわ

インドは豊かな国なのか

インドはIT産業をテコに目覚ましい経済成長を続けています。自動車の年間販売台数は1,200万台、バイクは6,200万台で需要はさらに伸びている上、大型ショッピングモールは買い物客で溢れ、テレビ、エアコン、冷蔵庫などの家電製品の販売実績も上がっています。そんな経済成長を謳歌する都会の人々は自信に満ち、輝いています。

一方、インドは人口11億人のうち約30%が貧困人口であり、5歳未満の子どもの半数近くは栄養失調、15歳以上の成人識字率が60%です。また児童の30%が小学校を卒業できず、世界の妊産婦死亡率の25%がインドであるという現実を見逃してはなりません。

インド赴任前に、「インドの官僚はプライドが高い」「自国ですべて賄うことができる」と考えている「50省庁、28州にわたる複雑な官僚機構なので援助の要請に時間がかかる」「技術協力が最も難しい国だ」というような話を聞きました。実際に官僚は優秀な人材が多く、何が今のインドに必要なのか明確なビジョンを持っていて、技術協力や無償資金協力で盲目的に飛び付いてはきません。有償資金協力についても、膨大な資金需要にもかかわらず、民間

たっています。故に、限られた資源を有効に活用するためには援助の課題をマクロ的にとらえるべきであるという声があります。しかし、マクロの視点で眺めると人の姿や現場の状況がぼやけて、効果的な技術協力ができない場合があるのではないのでしょうか。多様性に富む国だからこそ、あえてミクロな視点で地域ごとの課題を的確にとらえることが、技術協力の真のニーズを把握するためには重要であると考えています。

「現場」がJICA活動の原点です。インドにおいても現場の人々を中心に据えて案件形成や協力の方法を考えなければ、JICAの技術協力は意味を成さないということを、皆さんにも理解してもらいたいですね。

日々の出来事が 途上国との関係を 考えるきっかけに

インドに赴任して1年弱、プライベートでの目下の悩みは、「子どもにインドをどう見せるか」ということです。

先日、家族と、デリー市民の「台所」サロジナガルマーケットに行きました。そこで、貧しい一人の少女が「お金をちょうだい」と手を出してきました。インドではよくあることですが、中学1年生の娘がそれを見て、「お父さん、1ルピーちょうだい」と言っています。私は「こうした境遇のインドの子どものことを考えていたんだ」とうれしく思いましたが、「今、1ルピーあげてどうするの?」と聞き、そのときは、娘にお金を渡しませんでした。そして、中学3年生の息子の「なぜ?」の問いに、「1ルピーをその場であげて、あの少女が今晚のパンを買えたとしても、根本的な解決にはならない。例えば、1ルピー持っている人を10人、100人集めれば、1ルピーが10ルピーに、10ルピーが100ルピーになる。同じ1ルピーでも、別の使い方もあるんじゃない?」という話をしたのです。

しかし、長年援助のプロとして仕事をしている自分の心の片隅で、実は、そのとき1ルピーをあげなかったことに、後ろめたい気持ちが残ったとは言いきれません。インドでのこういった日常的な出来事は、私も子どもたちも、途上国との関係をより深く考えるきっかけ、いわば「エネルギー起爆剤」になっているのです。



インドには家計を支えるために働く子どもも多い